

## 主に遵うとは

### ルカ9:51~62

今日の福音書は、今、私たちの文化や考え方からは、理解するのが難しいと思います。外国人が私たちの文化を理解しにくいように、当時の文化や状況が分からないと、今日の本文を理解するのは難しいです。だから、できるだけ当時の視点から今日の福音書を見る方が良いと思います。今日の福音書は、2つの物語に分かれています。一つはサマリア人についての物語であり、もう一つは弟子の道についての物語です。そして、この2つの物語の中で、私たちが理解しにくいのは、「厳しさ」に関することです。最初の物語では、サマリア人に対する弟子たちの考え方が非常に厳しいということがわかります。二番目の物語では、弟子になることについてのイエス様の考え方が非常に厳しいです。この二つの話は、当時の状況と関連していますが、最初の話は、当時のユダヤ人とサマリア人の関係が良くなかったということを示しています。その時、イエス様と弟子たちはある山の下にいて、この山はイエス様の姿が変わる奇跡が起きた場所として、タボル山と推測されます。イエス様は、このタボル山からエルサレムに行かれるために使いの者を出されます。そして、タボル山からエルサレムに行くためには、サマリアを通過していくのが一番早い道でした。ところが、サマリア人たちはイエス様の一行を歓迎しませんでした。なぜなら、イエス様がエルサレムを目指して進んでおられたからです。

なぜ、サマリア人たちはエルサレムを目指して進んでおられたイエス様を受け入れなかったのでしょうか。これを知るためには、イスラエルの歴史を知る必要があります。ユダヤ人とサマリア人は同じ民族でした。しかし、ソロモン王の後、イスラエルは南北に分かれ、互いに敵対的な関係になりました。南の方はユダヤ人、北の方はサマリア人の祖先でした。敵対の関係のまま数百年が経ち、北イスラエルはアッシリアによって、南ユダはバビロンによって滅びました。アッシリアは、植民地からの反乱を防ぐために、植民地の人々を強制的に移住させ、それによって北イスラエル人と他の民族が混ざり合いました。バビロンも同じ政策を行いましたが、南ユダの人々は、自分たちのアイデンティティを守るために、同じ民族同士で結婚しました。この結果、南ユダは血統を守った民族になり、北イスラエルは血統を守れない混血族になりました。そして、南ユダ、つまりユダヤ人たちは、血統を守らなかったという理由で、北イスラエル、サマリア人たちを同じ民族とは思わず、差別しました。このことは、侵略によって崩れた神殿を再建することによって盛り上がり、大きな話題になります。ユダヤ人たちが神殿を再建することに、サマリア人を締め出したからです。サマリア人たちは、神殿の再建に参加したいとの意見を明らかにしましたが、ユダヤ人たちは血統のことを問題にして、サマリア人を受け入れませんでした。これによって、サマリア人たちは神殿の再建を妨げます。しかしユダヤ人は、ついに神殿の再建に成功し、サマリア人たちを神殿に入ることもできないようにしました。それでBC400年頃、サマリア人たちはグリジム山に自分たちの神殿を建て、この二つの民族は互いにより敵対するようになりました。

イエス様の時代にも、このような感情は残っていました。ユダヤ人は、サマリア人を差別し、サマリア人はユダヤ人を憎みました。このような中で、イエス様がサマリアのグリジム山ではなく、ユダヤのエルサレムを目指して進まれると聞いたので、サマリア人たちはイエス様と一行を歓迎しなかったのです。数百年の間、良くない感情がたまっていたからでしょう。そして、イエス様の弟子たちは、このことを感情的に、自分たちへの挑戦として受け入れました。それでイエス様にこう言います。54節の言葉です。「弟子のヤコブとヨハネはそれを見て、『主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか』と言った。」このヤコブとヨハネの言葉は、当時のユダヤ人がサマリア人をどう思っていたかをよく示しています。滅亡されてもよい民族！これがサマリア人に対するユダヤ人の考え方でした。

しかし、イエス様はこれを戒められます。弟子たちの考えは、徹底的にユダヤ中心の考え、民族主義的な考えであったからです。イエス様の福音と神的な力は、ある一つの国に属するものでも、他の民族を害するためのものでもありません。この世のすべての人のためのものであり、皆の平安のためのものです。反対されたとしても、歓迎されなかったとしても、神的な力によって強制しようという弟子たちの考え方は、非常に間違っていたことでした。私たちが持っている聖書には書かれていませんが、他の聖書の写本には、55節の後にこのような言葉がつけられて書かれているそうです。「人の子は人の命を滅ぼすために来たのではなく、救うために来たのだと言われ、」イエス様は、人々の救いのためにこの世に来られました。このこと、救いはイエス様の弟子たちが目指していくことであり、従わなければならないことです。

イエス様がサマリア人たちに歓迎されなかったように、福音も教会も、反対されることもあります。エルサレムに向かって進んでいた一行がサマリア人たちに歓迎されなかったように、私たちも受け入れられないこともあります。だからといって、私たちが私たちに反対する人と対立したり、彼らに厳しく振る舞ったりしてはならないのです。今日の福音書でイエス様はどうなさったのでしょうか。弟子たちを戒められ、一行と別の村に行かれました。これは、相手の反対を認められたことだと思います。サマリア人が持っている心の傷、怒り、悲しい歴史を理解してくださったと思います。そして、このようなイエス様の行動は、弟子たちが必ず学ぶべきことでした。福音は力によって強制するのではなく、平安を与えることであることを弟子たちは、悟らなければなりません。主に従うということは、神の力を持つことでも、対立したとき、勝つためのことでもありません。もし私たちに力があるなら、その力は、平安と愛だと思います。平安をもたらすこと、そしてその平安の中で愛するために、私たちは主に従うのです。

今日の福音書の二番目の物語に進んでみましょう。二番目の物語は、弟子の道についての言葉です。この言葉は、イエス様に従いたい人、すなわち弟子の候補者に対するイエス様の言葉です。しかし、イエス様は彼らにとっても厳しく話されます。覚悟を決めなさいというよりも、まるでご自分に従わないようになさったかのように見えます。それで私は、イエス様がなぜこんなに厳しく言われたのかを考えてみました。そして今日の福音書の前の箇所と後の箇所を読んでみました。今日の福音書が入っているルカによる福音書9章は、イエス様が弟子たちに権能を授け、遣わされたという言葉から始まります。しかし、今日の福音書の前の箇所である40節からは、弟子たちの失敗が書かれています。また、45節にはイエス様の死について理解できない弟子たちの姿が書いてあり、46節には弟子たちの中で、誰が一番偉いかという議論が起きます。49節には、弟子ヨハネが自分たちと一緒にイエス様に従わないので、イエスの名前で悪霊を追い出していることをやめさせたと言います。そして今日の福音書の最初の物語が出てきます。イエス様と自分たちを歓迎しなかったサマリア人たちを滅ぼそうということが弟子たちの考えでした。今日の福音書の二番目の物語である弟子の道についての言葉は、このような状況の中でイエス様がおっしゃったことです。

皆様はいかがでしょう。イエス様の心が理解できるでしょうか。イエス様は、このような弟子たちに、何が弟子の道なのか、何が弟子の正しい姿勢なのか、再び教えてくださる必要があったと思います。弟子たちが霊的なものよりも肉体のものに従うと、弟子たちはイエス様の後をつぐことはできないでしょう。このような彼らには福音の力は現れず、彼らは自ら滅びるでしょう。それでイエス様は、弟子であることが何なのか、何を最優先におくべきかを教えてください。58節でイエス様は「人の子には枕する所もない」と言われました。これは、イエス様に従う道が世の中の成功の道とは異なることを言われるのです。60節の言葉もこれと同じです。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい。」この言葉にはいくつかの解釈があります。その一つは、死者は（霊的に）死んでいる者に任せ、弟子は生きている人のために福音を宣べ伝えなければならないということです。最後に、62節の言葉は、当時、伝統的に伝えられてきた言葉だそうです。鋤に手をかける人の目的は、まっすぐな畝間を開けるためです。もし鋤を手にかけて後ろを顧みると、つまり他のことに気を取られると、まっすぐな畝間を開けることはできません。ルカによる福音書9章の弟子たちのように、霊的な戦いでも負け、イエス様の死を理解できないでしょう。誰が一番偉い人なのかを議論し、自分に反対する人を許さないでしょう。だからイエス様は、このような弟子たちは「神の国にふさわしくない」と言われたのです。しかし、このような言葉は、主に従うのが難しいことだけを示すのではないと思います。イエス様はマタイによる福音書6章でも、「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」と言われましたが、これは中途半端な態度を取ってはならないということです。イエスは、この弟子たちの道の言葉を通して、弟子たちは肉体的なもの、両方に従うことはできないということと言われたのです。

主に従うとは、こういうことだと思います。そして主は、ご自分に従っている私たちにご自分の働きを委ねられました。これによって、私たちはこの世の中で主の言葉に従い、主の中で隣人と共に主の平和を分かち合うことができるのです。マタイによる福音書11章30節で、イエス様は「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」と言われました。主の軛と荷が重いだけのものであれば、主は私たちにご自分の働きを委ねられなかったでしょう。主の弟子たちは、今日も自分の生活の場で主に従っています。私と皆様も日々、主に従う人になりますように。神の国にふさわしい皆様になりますように、主の御名によって祈ります。